

第3節 松倉城の石垣

公益財団法人日本城郭協会理事
加藤理文

1 はじめに

松倉城は、最高所の本丸を中心に、北東、東、西に伸びる尾根筋を利用して、曲輪群が広がっている。尾根筋境は、いずれも堀切によって遮断され、北東下鞍部には、両サイドから堅堀によって遮断された虎口が残る。また、主要部となる本丸・二ノ丸・三ノ丸・出柵形虎口と曲輪1と虎口1には石垣が残る。今回、この石垣の特徴をまとめ、石垣が築かれた年代についてまとめることにする。

2 石垣の範囲

城は、最高所に石塁で囲まれた約 24m四方の本丸内曲輪を置き、その東から南にかけてL字状で平坦面が南北約 24m×東西約 31mの石垣で囲まれた本丸外曲輪が付設し、ここが城の中核になる。東側には、一段低く東西約 40m×南北 15～20m程の二ノ丸が置かれ、東側は2段の石垣で区画される。さらに東側に、2段の階段状の曲輪が置かれ、最東端の曲輪1には石垣による遮断線が設けられている。この東側には、石垣より古い時期の遮断線となる堀切2が約 25m東に、さらにその先 100m に堀切1を設けている。

南側から西側にかけては、三ノ丸が置かれている。三ノ丸の西南隅角が櫓台で、南側は幅約 10～20m、東西約 50mの規模で、総石垣造りとなっている。この曲輪の北西側周辺は、一辺 2.0mを越えるような城内最大規模の石材を用いた石垣である。西側は、幅約 8.0～10mで南北 30m程の帯曲輪状となるが、石垣は南側 15m程で完結している。本丸外曲輪の南西端側に埋門あるいは石門と推定される遺構が検出され、帯曲輪石垣は、これと連動して終息している可能性が高い。

三ノ丸東南下に、東西約 20m×南北約 10mの出柵形虎口がみられ、北西側三ノ丸との間が階段状になっていると推定され、ここに門があったと思われるが、破城によって石材が崩され、埋められているため全容は判然としない。

大手口は北東下の谷筋をせき止めるように、現在も石垣が残り、ほぼ中央部に柵形状の折れがみられる。石垣は、以上の6箇所曲輪で確認されているが、いずれの石垣も自然石を積み上げた野面積みで、一部に粗割りしたような部分もみられるが、自然の摂理面であり、石材を加工した痕跡は認められない。また、中核部から北東、東、西に伸びる尾根筋には、いくつかの堀切がみられるが、石垣との同時併存は考えにくく、次期差と思われる。なお、織豊期の特徴を示す礎石建物が検出されているが、瓦は未検出で、瓦葺建物は無かったと考えられる。これは、高山の地は、寒冷地であり、通常の粘土瓦は内部の水分が凍結して破損・剥落するためであろう。

この城最大の特徴は、織豊期の大規模な石垣が残っていることにつくる。高さも 5.0～8.0m程と「高石垣」と呼んで問題は無い規模になる。主要部は、まさに高石垣で囲まれた総石垣造りの城である。問題は、この石垣がいつ築かれたかで、以下、石材の積み方、石材の大きさ、隅角石の構造等を詳しく検証し、石垣の構築時期を考えたい。なお、石垣に付いては、本丸から一面ごとに石垣番号を①からふること、場所特定をすることとした。最終は、㊦になる(30 頁の「第 13 図 松倉城跡石垣番号・遺構番号図」を参照)。なお、石垣に使用されている石材は、城内に点在する濃飛流紋岩で地元では「松倉石」と呼ばれている。この石は、板状節理によって、板状に割れやすく、大きな加工を施さなくても、ブロック状になっており石垣の石材として最適である。従って、石材の調達は極めて容易であったと推定される。

(1) 本丸内曲輪の石垣

本丸内曲輪は、城内最高所に位置し、四方を石塁で囲まれ、内部が穴蔵状を呈す遺構で、南側の東寄り約 2.0m 開口し、入口となる。全体的に台形となり、現状天端で東西面北側約 18m(南側約 23m) × 南北約 23m の規模となる。石塁の幅は、残された東、西、南共に約 2.5m を測る。穴蔵部分の規模は、東西面北側約 14m(南側約 15.5m) × 南北約 15m になる。



写真 23 石垣④ 本丸内曲輪南内面



写真 24 石垣⑦ 本丸内曲輪東内面

石垣は、西面を①、南面西側を②、入口西面を③、穴蔵南面西側を④、同西面を⑤、北面⑥、東面を⑦、南面東側を⑧、入口東面を⑨、南面東側を⑩、東面を⑪、北面を⑫とした。石塁はいずれも上部(天端)が破城によって破壊されており、旧状ははっきりしない。また、北面については、崩落が著しく隅角部は特定されるものの、築石部の位置特定は困難な状況である。

発掘調査が実施されたため、西側と南側については、石垣の最下段が確認されている。石垣の最下段には、胴木やグリ石等の補強の石垣は存在せず、基盤層を成形して石材を固定していた。東側石垣①は、本丸内曲輪の崩落土により幅約 1.5m × 高さ 1.0m が埋没、南側石垣②は、本丸内曲輪の崩落土により約幅 2.0 × 高さ 1.0m が埋没していた。石垣①と②については、現状で約 2.5m の高さを有している。また、石塁内側の石垣の残存状況については、南側が良好に残るものの、北側はほぼ失われており、ラインのみ旧位置を留めているに過ぎない。石塁内側の石垣については、最も残りの良い⑦の南側で約 1.0m になる。また、東側二ノ丸との比高差は、⑪の石塁上面で約 6.5m となる。



写真 25 石垣② 本丸内曲輪南外面



写真 26 石垣① 本丸内曲輪西外面

現状で確認される隅角は、いずれも算木積みとはならないが、築石部に比較し大型の石材を使用する傾向と、左右に石材を振り分けようとする意識はみられる。築石部は、石材の長辺側を横位置に置くことを基本に積み上げ、横目地を通そうとはしているが、石材の大きさにばらつきが大きく、部分的に目地が通るに過ぎない。ただ、隙間には極めて丁寧に間詰石を入れている。最大の石材は、石垣⑪と⑫の隅角に使用されている長さ約 2.2m×幅約 0.5mの石材になる。石垣の法面の傾斜角は、70～80 度と、かなり急傾斜である。



写真 27 石垣②と石垣⑨ 本丸内曲輪南面虎口

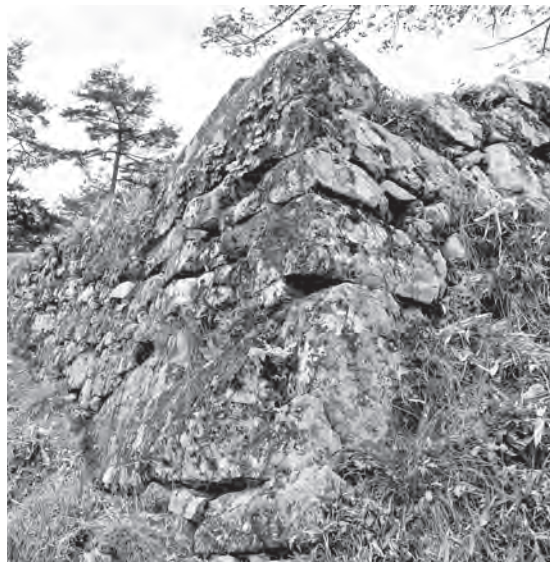


写真 28 石垣⑪と⑫ 本丸内曲輪北東隅角



写真 29 石垣⑫ 本丸内曲輪北面



写真 30 石垣① 本丸内曲輪西北端部

(2) 本丸外曲輪の石垣

本丸外曲輪は、本丸内曲輪の西側から南側を取り巻くように設けられたL字を呈す曲輪で、東南隅に、二ノ丸からの虎口が推定される。西側石垣⑭は破城により幅約 2.0m、高さ約 3.0mが崩落している。平坦面の本来の幅は約 7.0mになり、長さは約 24mが推定される。法面の角度は 70 度前後である。南側石垣⑮は破城により幅約 3.0m、高さ約 2.0mが崩落している。平坦面の本来の幅は約 6.0mで、長さは約 31mが推定される。法面の角度は 70 度前後である。東端に入口を設けるために、東から約 7.0mの箇所(石垣⑰)を入隅とし、約 1.0m北側へ凹ませている(石垣⑯)。入口は、北側の石垣⑨との間を約 2.0m空けて通路とし、南側に石垣⑱が取り付く。石垣⑱の法面の角度は 80 度になる。

東側の石垣⑲～㉓については、2段になり外曲輪を構成している可能性があるが、現時点でははっきり

しない。ただ、中央部については後世(近代)の積み直しの可能性が高い。

外曲輪を取り囲む石垣⑬～⑱は残存状況が良好で、特に石垣⑭・⑮の隅角は、最も良好に残る。高さは、現状で約 6.0mだが、上部が崩落しているため本来の高さは約 8.0mの高石垣となる。この隅角部は、



写真 31 石垣⑬と⑭ 本丸外曲輪北西隅角



写真 32 石垣⑮～⑰ 本丸外曲輪南面

算木積みとはならないものの、石材は自然石の直方体となる大型石材を意識して選別使用しており、さらに一部に長短部を左右に振り分けるような部分も認められ、算木積みを志向している。隅角部に使用されている石材は、いずれも長辺側が1.0mを越えるような大型石材である。また、間詰も極めて丁寧で、直方体の小型石材を利用し、ほぼ隙間のないように埋めるという高い技術水準が認められる。築石部も、横長の長さ約 1.0mを越える石材が多く用いられ、それを全体的にバランス良く配置し、石材を横位置に置くことで、目地を通そうとする意識がみられる。隅角部同様あえて大型石材を選別したことが推定され、隅角部と築石部の積み方に明確な区別は認められない。石材間の隙間には、丁寧に間詰石を充填する。長辺が約 1.0m を越える石材は、石垣⑮で約 40 石以上が使用され、最大値は約 $3.7 \times 0.5\text{m}$ になる。石垣⑭で約 35 石以上が使用され、最大値は約 $1.8 \times 0.8\text{m}$ になる。石垣の法面の傾斜角は、70～80 度と、ほぼ本丸内曲輪と同様で、かなり急傾斜である。



写真 33 石垣⑳、㉑ 本丸外曲輪東面(後方は石垣㉒)



写真 34 石垣㉓本丸外曲輪東面

(3) 二ノ丸の石垣

二ノ丸は、本丸東側の一段下に展開する長方形を呈す曲輪で、東西約 40m×南北 15～20mを測る。発掘調査で2時期の礎石建物が、東側で検出されている。西側を除き三方を石垣で囲まれた曲輪と推定されるが、南北部分の残存状況は極めて悪く、特に南面の西側(石垣㉕)ははっきりしない。北側斜面に残る石

垣(石垣②④)は、現存で 1.0m程度の低石垣になる。東側は、コの字型に2段の石垣が残る。外側の石垣は、石垣②⑥が約 7.0m、石垣②⑦が約 25m、石垣②⑧が約 17mの規模で残る。内側は、石垣②⑨が約 5.0m、石垣②⑩が約 20m、石垣②⑪が約 4.0m残る。石垣②⑦の北端が近代の通路によって崩落している他、全体的に他の曲輪と比較し石垣の旧状がはっきりしない曲輪である。

二ノ丸で特徴的な石垣が北斜面の中腹に残る石垣②④で、松倉城に残る石垣の中で、明らかに他の箇所との類似点を見出せない石垣になる。大型石材も利用されるが、他地区と比較すればその数は非常に少ない。代わりに平均すると 50cm 四方程度の石材を多用し積み上げているが、現存で高さは 1.0m程残っているに過ぎず、本来の高さは、はっきりしない。中には、長辺側を横位置に置く部分もあるが、ほとんどはランダムに積み上げており、そこに規則性を見出すことは出来ない。また、残存状況が、他所より悪いためか、間詰石も他所に比較し少ない。



写真 35 石垣②④ 二ノ丸北面石垣



写真 36 石垣②⑤ 二ノ丸南面石垣

同じく南斜面に分散して残る石垣②⑤だが、列をなして残存する状況ではなく、明らかに意図的に崩された感じを受ける。②④に比較すれば、西側には比較的大型の石材がみられ、これは他所の石垣石材と共通する大きさの石材になる。



写真 37 石垣②⑧ 二ノ丸南面東側石垣



写真 38 石垣②⑦・②⑧ 二ノ丸南東隅角

東端に位置するコの字型を呈す外側の石垣②⑥～②⑧は、大型石材を多用する傾向は、他所と同様である。ただ、石垣②⑦中央部に残る石垣は、明らかに上部と下部の様相が異なる。下部については、大型の石材を横位置において隙間に、中・小型石材を挟み込むようにしているが、隙間に間詰石はあるものの丁寧ではない。上部は、石材の大きさが小さいためか、大きく孕み出しており、間詰石はほとんどみられない。わずかに横位置においた石材も散見されるが、後世の積み直しを受けた可能性も考慮する必要がある。②⑧については、中・大型石材を横位置に置くことを基本に、丁寧に積み上げ、間詰石も充填されている。隅角に

については、5石程が残されており、北東隅、南東隅いずれも算木積みにはならないが、大型の直方体の石材を用い、左右に振り分けることを指向しているのは確実な状況である。また隅角の稜線を合わせようとする意識もみられる。石垣⑳の東隅角法面の角度は60度と緩やかである。

上部の、石垣㉑～㉓は、高さ1.0m程しか残存していないが、隅角は、外側の石垣㉒～㉓と同様で大型石材を左右に振り分けようとしている。わずかに残る築石部の石垣㉓は、石材そのものは中型石材を用いているが、旧位置を留めてはいると思われるが、孕み出し等により極めて乱雑に置かれたように見える。石材間の隙間が空いているため、間詰石も失われたと思われ、ほとんどみることはできない。



写真 39 石垣㉑ 二ノ丸東面石垣



写真 40 石垣㉒・㉓ 二ノ丸北東隅角

(4) 曲輪1の石垣

二ノ丸から東側尾根筋を40m程下った場所から平坦部となっている曲輪が曲輪1で、北面(石垣㉔)と東面(石垣㉕)、南面(石垣㉖)に石垣がみられる。北面の石垣㉔は、長さ約16mに渡ってみられるが、西側については1石あるいは2石程度が残されるだけで、東側7.0m程度が、5石程残りその高さは1.0m前後になる。築石部は極めて丁寧で、左右に大型石材を置き、その真ん中に長方形石材を田の字型に積み上げており、隙間には摂理で割れた10cm程の長方形を呈す薄い石材を間詰石とする箇所もみられる。法面の角度もほぼ直角で、当初期の状態でも1.0m～2.0m程の低石垣が推定される。



写真 41 石垣㉕ 曲輪1東面石垣



写真 42 石垣㉔ 曲輪1北面石垣

東面の石垣㉕は、約10mで、南東隅、北東隅は崩落している。石材は、大型石材を使用するものの、高

さは5石程度で、石垣②同様、当初から 1.0m～2.0m程の低石垣が推定され、間詰石もしっかりと充填されている。石垣④は、ほとんどが後世の通路によって破壊を受け、最下段の石材は前方へせり出している。長さも、3.0m程度と短く、西側部分の続きを確認したが、それらしき痕跡をみつけるには至っていない。従って、曲輪1の石垣は、コの字を呈すように配置されてはいるが、北側は長いものの、南側については当初から短かった可能性が高い。東尾根の石垣は、ここをもって完結し、さらに東に広がることはない。

(5) 三ノ丸の石垣

三ノ丸は、本丸の南西下に展開する曲輪で、本丸外曲輪の西下から南下にかけて広がる大規模な曲輪である。西端は、櫓台状に1段高くなっていることから、櫓の存在が推定されたため、発掘調査が実施された。発掘調査では、崩落はしているものの、櫓台東側の石垣の下部と石段が検出され、ここに櫓が存在していたことが立証された。

本丸外曲輪の西下の帯曲輪の幅は、北端が約 7.0mで、南へ約 23m延びた幅約 10mの箇所、南から続く石垣が東に 1.0m程折れて終息する(石垣④)。そこから約 10m南に続くのが石垣④、現在の通路を挟んで西へ約 18m延びるのが石垣③、直角に南に約 10m延びるのが石垣④、ここに巨石が位置するため、この巨石を利用し 3.0m程折れる石垣が石垣④、そこから東に折れて約 43m延びる城内一長い石垣が石垣④である。この石垣は、北に折れて北側斜面に取り付いている(石垣③)。

曲輪面に擦りつく石垣④と、石垣④の北端部分が崩落により、旧状を留めていないが、その他の石垣は破城を受けた上部の 1.0～1.5m程を除けば、概ね良好に当初の形態を留めている。最も北側に位置する石垣④は、現状で高さ約 3.0m、北側隅角部は崩落により傾いてはいるが、直方体の巨石を積み上げている。築石部も、全体に巨石を使用するが、北端が最も多い。この北端に、この面最大の巨石となる長辺約 2.5m×0.5mの石材がみられる。この石材の上にも2.0m越えの巨石が残る。面全体に巨石を横位置に配置し、その間に中型石材を目地が通るように置き、全体的なバランスをとっている。隙間には、間詰石を丁寧に詰めている。石垣④の南端と石垣③の間を現代の通路が通っているため、ちょうど折れて西へ向きを変える部分の様子が判然としない。



写真 43 石垣③～④ 三ノ丸隅櫓台石垣



写真 44 石垣④ 三ノ丸西面北側石垣

石垣③は、ここを起点に西側へと延び最西端は、櫓台の石垣になる。この石垣③が、城内で最も巨石を多用した石垣面で、最大値を誇るのは、東端近くの最下段に位置する石材で横約 3.7m×縦約 1.0mを測る。この他、2.0mを超える直方体を呈す巨石も 10 石程度観察できる。石垣④と同様で、巨石は面全体にバランス取るように使用している。上部に置かれた巨石は明らかに西端を意識した配置で、約 2.8m×1.0m、

約 2.5m×約 1.2mの2石を上部に、約 2.8m×約 1.0mの巨石を中程に振り分けている。このように全体に振り分けられた巨石の間には、直方体となる中型石材、あるいは方形を呈す石材をなるべく隙間が出来ないように配置し、それでも残る隙間には、丁寧に間詰石を充填している。南東隅角部は、下部は方形の巨石を置き、その上に直方体の石材を左右に振り分けるように置いている。算木積みとはならないものの、算木を志向する積み方である。なお、櫓台上の発掘調査が実施されたため、三ノ丸本来の遺構面がほぼ確定され、石垣上部の崩落は約 1.0～1.5mということが解り、石垣④③の本来の高さは、北東隅角部で約 6.0m あったことになる。石垣④③の法面の角度は 74 度と、かなり勾配はきつい。



写真 45 石垣④③ 三ノ丸北面石垣



写真 46 石垣④② 三ノ丸西面石垣

三ノ丸西面に当たる石垣が、石垣④②で、南西隅角に露頭する高さ約 5.0m×幅約 3.5mの自然石があるため、本来はコの字型になるべき石垣が、南西隅で角を取らず曲がるため、シノギ積みとなっている。従って、西面は、石垣④②と④①で構成されることになる。石垣④②、④①も、石垣④③と同様で、巨石を用いた積み方がみられる。巨石石垣は、石垣④②の南北端に多く配置され、特に石垣④③と隅角を形成する北西隅角に多い。最も大きい石材は、南端に用いられている長さ約 2.8m×幅約 1.0mの長方形の石材になる。中央部については、長方形の石材を下部に配置し、上部は方形形状の石材を組み合わせ、横目地が通るような積み方となっている。中央部に使用する石材は比較的小ぶりな石材になるが、極めて丁寧な積み方で、間詰石も隙間なく充填されている。石垣④②の法面の角度は 70 度を測る。



写真 47 石垣④① 露頭石と石垣



写真 48 石垣④②と④① 三ノ丸南面西端石垣

石垣④②の南側と石垣④①は、露頭石に影響され、小型石材を利用することで周囲の石材との間を巧みに埋めている。特に、石垣④②の西南隅角の露頭石直上の石材は、大型石材との隙間を埋めるために、外側

へと突出している。また、石垣④は、上部に約 2.0m×1.0mの大型石材を配置するためか、小さな石材を積みあげることで、その間の隙間を完全に埋めながら、露頭石の形状に併せ、曲輪側(北東)へ軽くへりの字状に凹ませている。その他、南面の石垣④の西南隅角の石材を水平に保つために、南西側に突出させることで対応するなど、極めて丁寧に自然石を収めている。三ノ丸の石垣は、城内一巨石を多く配置するだけでなく、露頭石を巧みに取り入れるなど、石垣構築技術の高さを示している。なお、露頭する自然石があるためか、現状で石垣④の最も高い箇所は約5.0mで、石垣④が約7.5mを測る。石垣④の法面の角度は、75度になる。

石垣④は、松倉城内の石垣で、最も幅広の石垣になる。西隅角は、シノギ積みになるが、最下部の露頭石の上は、長方形の石材(長さ 1.5～2.0m×幅約 0.5m程)を交互に左右に振り分けて積んでおり、あきらかに算木積みを志向している。東端は破城された虎口により隅角の形状はほとんど解らない。崩落した上部に、若干北に折れる石垣③が検出されるが、基盤にぶつかり終息している。西側から 25m～32mの間の下部は、西隣と同様で、中小石材だけで積み上げ、上部にのみ巨石を用いている。巨石の数は僅かだが、水平方向を基準とし配置されている。32m部分で、石垣は大きく積み方を変え、中・大型石材を横位置にし、幅約 3.0～4.0mで、上まで積み上げている。これは、この石垣下部に虎口が存在するためと推定される。ここから東端までは、巨石に中小石材を用いて積み上げる石垣となり、石垣③へ接続すると思われる。石垣③は、北側基盤層と接続する 10 石程度が検出されただけで、上部は崩落によりほとんどが失われている。この三ノ丸の南面上部が最も破壊が著しい地区で、最大 2.0m程崩落している。現状の高さは、西端約 5.0m、中央部約 5.0m、東端約 4.0mになる。法面の角度は、74～76度になる。



写真 49 石垣④ 石垣③との接点近くの石垣



写真 50 石垣③ 三ノ丸東面石垣

(6) 出柵形虎口の石垣

三ノ丸の東端から南側へ方形に突出する曲輪が出柵形虎口で、この虎口の北西部から破城によって埋められた通路と虎口跡が検出されている。東端の石垣⑤は、本丸外曲輪の南東隅角から、約 10m離れた場所を起点とし、南に約 10m伸びる。南東部で直角に折れ、西に約 20m伸びる石垣が石垣⑥、再び直角に折れ北に約 8.0m伸びる石垣が石垣⑦、また直角に折れ約 5.0mで終息する石垣が、石垣⑧になる。三ノ丸石垣④と石垣⑧の距離は、約 5.0mで、この間に通路と虎口が推定される。

石垣⑤は、50 cm前後の石材を積み上げた石垣で、上部に 70～80 cm程度の石材もみられる。隅角は比較的大型の石材を利用し積み上げてはいるが、上部に長さ 1.0m、幅 30 cm程度の直方体の石材を交互に積む部分もみられる。基盤層は、北が高く南が低くなる斜面のため、石垣の高さは、北端が1石で約 50 cm、最南端は約 3.5mとなる。

石垣③⑥は、出柵形虎口では最も幅広の石垣となるが、ここも基盤層が西に向かって15m進むと約1.0m上昇し、そこから6.0mの間に一気に3.5m下降する。南東隅角は、長辺側が1.0m程度の石材が最大で、左右に振り分ける意識はあるものの、算木積みとはならない。対して、南西隅角は、同じく算木積みにはならないものの2.0m近い石材を利用し、積み上げている。築石部は、全体的に50cmに満たない石材を使用し、隅角同様西側4.0m程は、50cmを越える石材が用いられている。いずれも、間詰石は丁寧に充填されている。高さは、天端が破壊されているため推定値になるが、基盤が最も低くなる南西隅角部が約5.0mで、その他は概ね3.0m程度と思われる。現状で、残存する石垣は1.0～3.0m程である。



写真 51 石垣③⑥ 出柵形虎口南東隅角



写真 52 石垣③⑥ 出柵形虎口南東隅角から

西面の石垣③⑦は、出柵形虎口の中では、最も大きな石材を築石部に使用している。南西隅角部も、比較的大型の石材を用いている。最大の石材は、中央やや北よりの上部に残る長辺約2.3m×短辺約0.9mの石材で、その他縁辺部に大型の石材が配置される状況ではある。築石部については、中央部に小型石材を使用するものの、積み方は丁寧で、間詰石もしっかり充填されている。南が低く、北が高い基盤であるため、南が約5.0m、北が約2.5mの高さがあったと想定される。

北面の石垣③⑧は、北側の通路と虎口が、三ノ丸と出柵形虎口の上部の石材を落とし込んで埋められているため、下部まで調査は出来ず、1～2石程度しか判明しない。隅角部のみ4石が確認されているが、算木積みとはなっていない。築石部についても、中・小型石材を積み上げていると思われる。

西面及び、南面の西側のみ大型石材が使用されているのは、通路からみえる箇所であったためと推定される。通路左右の状況については、埋められた石材によってはっきりしない。法面については、いずれの面も80～85度と急勾配となる。これは、石垣の高さが低いためと思われる。

(7) 虎口1

本丸から北東側に伸びる斜面と、南東側に伸びる斜面との間の暗部に設けられた石垣造りの虎口である。虎口の左右には堅堀が設けられ、その中央部を開口して石垣の虎口がみられる。

石垣③⑨は東西約7.7mを測り、高さは西側で約1.7m、東側で約0.8mである。石垣③⑩は石垣③⑨の側面で、長さ1.5mである。

(8) 埋門

本丸外曲輪西面石垣③⑭の南西隅角から約3.7m北側の箇所で、南北幅約2.2mの石塁が検出された。石塁の東西幅は、約8.5mで、石垣③⑮に接続すると思われる。なお、この石塁によって、帯曲輪は完全に南北が遮断されることになる。この部分の発掘調査によって、石垣③⑭から約1.3～1.4m離れた箇所を東側の

面とし、約 2.5m 前後離れた箇所には西側の面をもつ埋門(石門)跡を検出。埋門の高さは、1.5m 前後で、そこに天井石が乗っていたと推定される。天井石は、約 1.8m×約 0.7×約 0.3m の規模で、3 枚が上に乗っていたと推定される。埋門の石垣は、石垣④⑥～⑤⑦になる。各石垣の長さは、石垣④⑥が約 5.7m、石垣④⑦が約 2.3m、石垣④⑧が約 5.8m、石垣④⑨が約 1.3m、石垣⑤⑥が約 2.2m、石垣⑤⑦が約 1.2m となる。路面は、敷石により覆われている。石垣の積み方については、徹底的な破城が行われており、旧状ははっきりしない。ただ、石垣の構造や配置から、門の入口正面は北側、石垣④⑥と④⑨の間であることは確実である。



写真 53 石垣④⑧と⑤⑦ 南より



写真 54 石垣④⑧と⑤⑦ 南西より

3 石垣構築技術の変遷

城郭石垣の規格化は、文禄期(1592～96)以降に実施された豊臣秀吉による割普請、さらに徳川幕府による公儀普請等を契機にして、各地に残されていた独自性の強い石垣構築技術が淘汰され、全国的にほぼ統一された基準をもつ石垣が普及発展していくことになる。全国的な統一された石垣の普及は、慶長期に始まり、関ヶ原合戦後の慶長の築城ラッシュと呼ばれる時代以後にほぼ定着する。

松倉城は、天正7(1579)年、飛騨の国人領主である姉小路頼綱(三木自綱)が築いたのが最初とされる。同13年、羽柴秀吉による、越中飛騨侵攻後、金森長近に飛騨一国3万8000石が与えられた。長近は、当初、鍋山城(岐阜県高山市)を居所としたが、同18年、天神山の古城跡に新城・高山城の築城に着手、慶長10(1605)年頃に完成したと伝わり、以後金森氏の飛騨支配の拠点となった。金森長近は、飛騨支配の一環の中で、領国内に石垣を用いた城をいくつか築いている。松倉城も、その一つと考えられている。

松倉城に残る石垣の築城年代を考えるにあたり、城の創築及び廃城年代を考え、天正7年前後から、文禄年間前後の全国的事例と比較検討し、松倉城に残る石垣の構築年代と構築者について考えてみることにしたい。石垣様式の変遷については、北垣聡一郎氏による一連の研究以降、各地で比較検討が進み、隅角部・築石部の積み方や構造、勾配(傾斜角や反り)、使用石材や石材の加工度・加工方法などによる判断基準が示され、全国的な石垣様式の変遷が示されている。特に、隅角部の積み方や構造の変遷が、築石部に比較し検討しやすいため、松倉城に残る隅角部の状況をみておきたい。

隅角部の状況については、最も残存状況が良好な、本丸外曲輪南西隅角と、積み方が若干異なる二ノ丸南東隅角を挙げておく。まず、本丸外曲輪南西隅角(石垣⑭と⑮の接点部分)の下部構造であるが、現状の最下段の石材の下に一石の石垣が基盤層を成形して据え置かれていたのが発掘調査で確認されている。隅角部の石材は自然石の中でもほぼ直方体となる石材を選び、角石として配置する。算木積み状に角石の控えを左右にとって構成されているが、その長さは不揃いで、角石の大きさや形状も一定せず、

明確な算木積みとはならない。角石の築石側が、極端に下がらないようにするためか、小型の間詰石によって角度調整を図り、ほぼ 10 度前後にする傾向がみられる。間詰石の厚さは 10 cm 前後で、数石によって調整している。石垣⑮の角石は、長さ 0.8～1.5m で、幅は 0.4～0.6m と、ほぼ大きさを揃えている。石垣⑭の角石は、長さ 0.5～1.6m で、幅は 0.3～0.5m で、石垣⑮に比較し、角石の控えは短く不揃いである。石垣の法面の傾斜角は石垣⑭が 70 度前後、石垣⑮が 63～66 度になる。



写真 55 石垣⑮西側隅角



写真 56 石垣⑭南側隅角

二ノ丸南東隅角(石垣⑳と㉑の接点部分)は、下部から4石程度が残存するが、大型の自然の方形巨石を利用し、角石の控えを左右に振り分け、算木積みを志向している。控えは一定せず、間詰石等は見られないが、何らかの原因で失われた可能性が高い。角石は、約 25 度程度の傾きで、石垣の法面の傾斜角は 60 度と、本丸周辺部に比較し緩やかである。角石は、自然石の中でもほぼ直方体となる石材を選び、配置している。

この石垣の築造年代を知るために、天正7年前後から文禄年間頃までの年代が確実な各地に残る石垣の隅角部をみておきたい。

織田信長の甥・織田信澄は、天正6年に琵琶湖西岸の高島郡の支配の拠点として大溝城(滋賀県高島市)を築いた。現在、この城には信澄が天正6年に築いたと考えられる天守台の石垣が残されている。天守台は、本丸の南東部に位置し、東西 24×南北 29m の規模で、高さ(比高)約 5.0m(最高部 6.5m)を測る。石垣は、自然石を用いた野面積みであるが、石材は長辺2mを越える直方体の巨石が多く用いられ、算木積み状に角石の控えを左右にとって構成されている。下部は控えも長くとられているが、中段より上の角石の長さ、大きさや形状も不揃いで、明確な算木積みとはならない。石垣石材は、花崗岩である。

天正8年、丹後宮津に入封した細川藤孝は、田辺城(京都府田辺市)を築いた。平成2・3年度に、天守台を含めた発掘調査が実施され、その規模は、東西約 21×南北約 31m、基底部からの残存高 4.5m で、平面形態は、北東部に入隅をもつ長方形であったことが判明した。この天守台の石垣の隅角部は、横長の花崗岩の自然石を選択し、左右交互に控えを長くにとって積み上げており、算木積みの意識は高い。石垣の構築年代は、天正8年と考えられている。なお図面によると、細川時代の天守台は水堀に囲まれ独立していたようだが、京極・牧野時代になると本丸石垣と連結されたと考えられている。



写真 57 大溝城天守台



写真 58 田辺城天守台

天正13年、小牧長久手合戦の翌年、豊臣秀吉は、水口岡山城(滋賀県甲賀市)に中村一氏を配した。この城は、慶長5(1600)年の関ヶ原合戦で、合戦直後に池田長吉に攻められ落城し、以後利用されることは無かった。そのため、現在、この城に残る石垣は、天正13年から慶長5年の間の石垣で間違いないことになるが、大半は、天正13年に築かれたものと考えられている。現存する石垣の中には、わずかに矢穴痕の認められる石材が残る。これは、三雲城(滋賀県湖南市)から運ばれた石材と考えられている。現存する石垣は、自然石(若干、粗割された石材も含む)を主体に積み上げられているが、隅角部は長短を交互に積んだ算木積みとなるが、隅角の稜線は揃わず、発展途上の段階である。



写真 59 水口岡山城に残る石垣



写真 60 中津城 埋め殺された黒田期石垣



写真 61 中津城鉄門跡の隅角部



写真 62 中津城三ノ丸南面隅角部

天正 15 年、15 万石を与えられた黒田孝高は、豊前中津に入った。翌年より、瀬戸内海海運を押さえる要衝の地である山国川の河口付近に中津城(大分県中津市)の築城を開始した。黒田時代に築かれた石垣は、本丸北面、本丸北西面から山国川に沿って鉄門付近まで、三ノ丸南面の発掘調査で検出された石垣などになる。三ノ丸南西部の石垣隅角は、築石部に比較して大きな石材を角石として配置し積み上げている。だが、石材の大きさこそ揃えているが、左右の控えの長さは異なり、算木積みにはならない。対して、本丸北面隅角部は、東側が細川時代に拡張されているため黒田時代の石垣が埋め殺されている。現状では片面のみしか確認できないが、石材はほぼ直方体の自然石を用い、控えの長い角石による算木積みとなる。鉄門跡の隅角部は、丸みのある直方体の神籠石の石材を角石に多用しており、本丸北面と比較して角石の控えが短い、これは石材に起因する問題と捉えられる。意識としては、算木積みを志向しているとして問題は無いと思われる。中津城の石垣の隅角部は、三ノ丸南面は算木積みにならないが、本丸周辺部はかなり算木積みを志向している。これは、主要部と縁辺部の違いと理解しても良いのではないだろうか。

朝鮮出兵で、韓国の釜山周辺に築かれた倭城は、築城年代が特定できる貴重な城跡である。文禄2(1593)年に、黒田長政が築いた機張城(大韓民国釜山広域市)にも石垣が比較的良好に残されている。いずれの石垣の隅角も、直方体に近い石材を利用し、算木積みを意識し控えを左右に振り分けてはいるが、控えの長さは短く不揃いで、石材の大きさや形もバラツキが多い。

天正 19 年～文禄期に築かれた肥前名護屋城(佐賀県唐津市)に残る石垣の隅角部は、割普請であったためかその構成は多様である。直方体の自然石を利用した算木積みを志向する隅角、粗割石による控えの長い算木積み、矢穴を用いた割石による控えの短い算木積み、方形の割石を用いそれを積み上げた控えのない算木積みではない隅角等、異なる特徴をもつ隅角部の構造が並存しているのが特徴で、この時期の全国的様相の縮図と理解される。



写真 63 機張城天守台



写真 64 名護屋城船手門北西下



写真 65 名護屋城本丸旧石垣

松倉城の主要部の隅角は、上下の角石が算木積み状に左右に振り分けられる部分もみられるが、全体からみると三割には満たない。角脇石とみられる石材もみられるが、意図的に配置したとは思えない。石材は、ほぼ自然石(板状節理の石材であるため、加工度が判別しにくい)で、その高さが揃う石材を選別し利用しているが、長さ(控えの長さ)は様々である。また、石材全体が長方体となる石材を選別しようとしているが、全体は長方体とはならず、尻すぼみの形状となるもの、表面は長方体だが、断面は長方体とならな

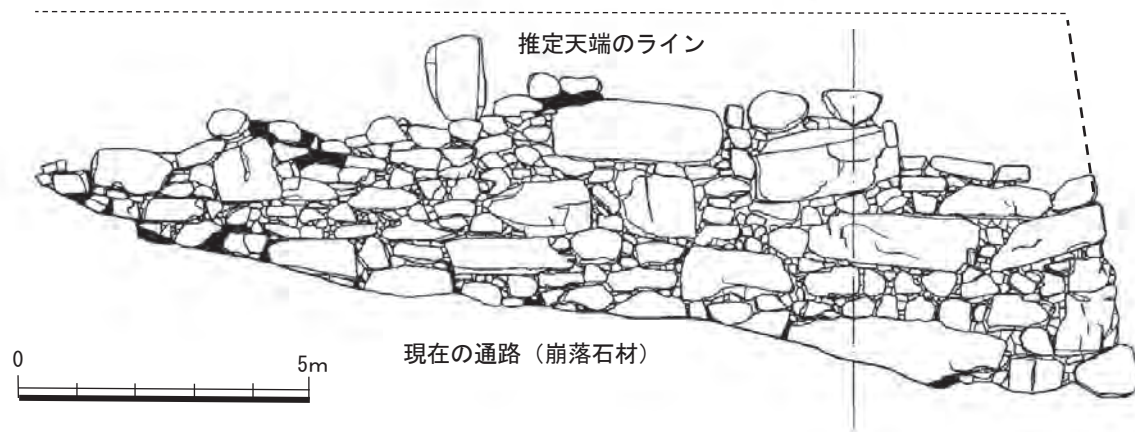
いもの等、法量を整える段階までには至っていない。

石垣に使用されている石材は、城内に点在する濃飛流紋岩で地元では「松倉石」と呼ばれている。この石は、板状節理によって、板状に割れやすく、大きな加工を施さなくても、ブロック状になっており石垣の石材として最適であるが、粗割については判別するのは困難である。

勾配(石垣の法面の傾斜角)は、主要部と主要部以外では、大きく異なる。主要部は70～80度と、かなり急傾斜である。この傾斜角は、角石の配置に影響を受けており、松倉城の角石は、築石側に下がることを退けるため、小型の間詰石を入れることで、なるべく水平方向に置こうという意識がみられる。二ノ丸については、主要部に比較すれば60度とかなり緩やかな勾配となる。

4 松倉城の石垣の年代

松倉城に残る石垣の大きな特徴の一つは、主要部を中心に巨石が使用されていることである。最大の石材は3.7m程で、2.0m前後の巨石が集中使用されているのは、三ノ丸北面の石垣⑬と⑭で、次いで南面の⑩の東側と西面の⑫、本丸外曲輪西面石垣⑭と南面の石垣⑮になる。これらの巨石は、基本的には長辺側を横位置とし、ほぼ水平になるように置いている。石垣⑬・⑭・⑩は、10石程度の複数の巨石を、一面に意図をもって組み込んだようにもみえる。明らかに「鏡石」で、通路横にシンボル的に配置したとしか思えない。城における「鏡石」は、石の大きさと、来訪者を驚かすだけではなく、その石を切り出してそこに据えた石工の技と、その技術集団を抱えている城主の権力をみせつける効果があった。信長の安土城にもみられるが、地方へ波及し一般化するのには豊臣秀吉による天下統一後のことである。



第44図 石垣⑬実測図

城の中核部となる本丸と三ノ丸は、隅角部と築石部の積み方や使用石材はほぼ同一で、明確な変化は認められない。ただ、大型石材は、隅角部に集中傾向がみられる。主要部の築石部は、石垣⑩のほぼ中央部の小型石材を積み上げた部分のみ「乱積み」となるが、他は明らかに横目地を通すことを目指している。しかし、石材の大きさや形状により、「布目崩し積み」となる箇所がほとんどである。

石垣の高さも本丸及び三ノ丸は、約8.0mを測る箇所も複数みられ、大部分が5.0mを越える高石垣である。法面も、70～80度と、かなりの急傾斜で、そこに巨石を使用するのは、明らかにみた目を意識してのことであろう。それは、主要部の南東部に付設する出枳形虎口の石垣にも当てはまる。南側の石垣⑳と東側の石垣㉑は、小型石材を用いた乱積みであるが、虎口横になる石垣㉒と㉓は、築石部にも巨石を用いて

いる。これも、みせる意識の表れであろう。主要部の石垣は、こうした特徴から天正13年に入封した豊臣系の大名の金森氏によって築かれた石垣と考えられる。



写真 66 本丸外曲輪南西隅角



写真 67 本丸外曲輪南面(石垣⑮)の築石部

前段でみたように、同時期他城郭と比較しても、ほぼ同様の特徴を示しているため、松倉城に残る前述のような特徴をもつ石垣は、金森在城期として間違いないと思われる。だが、隅角の石の振り分け方や、間詰石の状況、巨石の使用等をみると、さらに新しい時期の天正後半期から文禄期の特徴と捉えることも可能で、松倉城の廃城年代を再度検討する必要がある。

これに対し、二ノ丸東側は、様相が異なる。隅角部は、巨石を利用した算木積みを志向しているが、築石部は、一部巨石がみられるものの、大部分が中小石材による乱積みである。天端石が大きく崩落しているため、高さははっきりしないが、およそ5.0m程と推定され、主要部のように8.0mという高さにはならない。また、法面の角度も60度と、主要部に比較するとかなり緩やかである。

二ノ丸で特筆されるのは、北側の石垣⑭と、南側の石垣⑮である。他の場所と比較し、著しく破壊を受けたのか、あるいは崩落したかによってほとんど旧状を留めていない。特に石垣⑭は、他所と積み方や石材の大きさ等が異なる。石材も50cm四方程度と小さく、現存高さ1.0m程の石垣になる。残された石垣を観察すると、長辺側を横位置に置く部分もあるが、ほとんどは乱積みになる。残存状況も悪いためか、間詰石もほとんどみられない。主要部の極めて丁寧な石垣と比較し、残存状況の悪さを差し引いても、余りに稚拙といわざるを得ない。

南側の石垣⑮は、さらに残存状況が悪く、意図的に崩された感が強い。⑭と比較すれば、西側には比較的大型の石材がみられるため、本来は、石垣⑮に続く同様な特色をもつ石垣の可能性もある。一部に、石垣⑭と同様の特徴もみられる、これは単に残存状況の悪さであろう。

二ノ丸では、発掘調査によって2時期の礎石建物が検出されているため、石垣も2時期があったとしても不思議ではない。そう考えれば、他所と様相が異なり稚拙な石垣⑭は、主要部より古い段階の石垣として問題無いと思われる。年代的には、天正13年以前で、天正7年以後ということになる。従ってこの石垣は、天正7年から、本能寺の変までの間に、飛騨の国人領主である姉小路頼綱(三木自綱)が築いたとするのが妥当と考える。この時期、三木氏が築いたことがほぼ確実な石垣が、古川城(岐阜県飛騨市)の土留め石垣による虎口と、向小島城(岐阜県飛騨市)で検出された土留め石垣である。両石垣の特徴と比較しても、

ほぼ同様であるため、石垣⑭は三木氏段階と考える。



写真 68 古川城で検出された、金森時代の石垣



写真 69 前段階の石垣

曲輪1及び虎口1の石垣は、大型の石材を利用して築いた低石垣で、その高さは最大でも 2.0m程度と考えられる。主要部と比較し、極めて低いが、石垣の積み方は二ノ丸の石垣②⑥～②⑧に共通する。また、金森氏が古川城(岐阜県飛騨市)で築いた巨石を用いた虎口周辺の石垣とも共通する。古川城の石垣からは、大窯3～4の遺物が伴っており、金森氏の構築が確実である。主要部と二ノ丸東面、曲輪1、虎口1の石垣の積み方の差は、時期差というより、機能差あるいは、場所の違いによるみせるための意識の違いによって生まれた差と思われる。

織豊政権は、新たな領国に新規大名が入封した場合、主に使用する城については、たとえ短期間でも主要部には石垣を構築し、礎石建物を築き、屋根には瓦を葺くことを基本としていた。ただ、飛騨地方や北陸地方・東北地方という寒冷地では、瓦が寒暖差で割れるため、瓦は導入されていない。瓦以外の石垣・礎石建物については、例外なく導入されている。飛騨地方も、その例の通りである。金森長近は、前任地の越前大野城(福井県大野市)でも石垣を導入しており、その延長線上に松倉城が位置付けられる。松倉城の廃城年ははっきりしておらず、石垣からみる限り、少なくとも、高山城が完成した慶長 10 年前後までは、何らかの形で存続したとしても問題ない状況を示している。

最後に、本丸外曲輪西下で検出された「埋門(穴門)」の構造についてまとめておきたい。埋門は、大きく2つに分類される。1つは、石垣を割ってその間に城門を造り、その上に土塀や櫓という建物を建てる形式で、もう1つは、石垣(土塁)に穴を開けて、そこを通路としたり、簡易な門扉を設けたりする形式だ。どちらも防御性が非常に高く、裏口や非常口として用いられた。

今回、検出された埋門は、石塁で門(内側の高さ約 1.5m)を構えて天井板に石板を用い、地面に敷石を配する極めて特殊な構造をもっていたと推定される。特筆されるのは、通路に敷石が敷かれていることと、石垣の一番下を 20cm 程出っ張らせる「アゴ止め石」がみられることである。この技法は、松倉城の他の場所ではみられない。石垣を積み上げて設けた埋門を強固に保つための工夫と思われる。

松倉石が板状節理によって、板のような石材が確保出来るために考え出された埋門と思われる。方形を呈す4本の石材と、東西の通路脇に板状節理で割れた方形の石材を配置し、天井石を乗せて通路を確保している。通路脇は石塁になり、西側は三ノ丸の石垣④⑤と④⑥に接続し、東側は本丸外曲輪の石垣⑭に接続していたことはほぼ確定される。だが、上部構造については、現時点ではっきりしない。



写真 70 玖島城に残る「穴門」



写真 71 小丸城本丸東虎口の「石門」

現在みられる扁平な天井石をもつ「埋門(穴門)」をみておきたい。天井石に扁平な石材を並べたのが、玖島城(長崎県大村市)大手門脇にある穴門で、枡形に入った敵兵を背後から攻撃することを狙ったものと思われる。天井に下を監視攻撃するための穴が開けられているのが特徴になる。築造年代は、はっきりしないが、板状の石材を乗せてある所は、共通項になる。小丸城(福井県越前市)本丸東虎口の石門は、入口左右に立石を配し、その上に板石を乗せる構造は共通する。天正3年、柴田勝家の与力であった府中三人衆の一人、佐々成政が築いたとされ、年代的にも合致する。ところが、この石門は、昭和 49(1974)年に本丸内に忠魂碑を建てる際に発掘されたものを積んだ可能性が指摘されている。

以上、松倉城に残る石垣の特徴についてまとめ、その構築年代についてまとめてみた。ここ数十年、全国で実施された同時期の石垣調査成果から導き出した結論であるが、飛騨市で実施された発掘調査によって、金森氏と三木氏段階の石垣が検出されたのは、大いに役立った。前述したように、天正～文禄期(1573～96)以降、織豊政権の支配地拡大により、各地に残されていた独自性の強い石垣構築技術が淘汰され、全国的にほぼ統一された基準をもつ石垣構築技術が普及発展していくことになる。飛騨市も、この例にもれず、金森長近の入封によって、統一基準に近い石垣が築かれ、やがて完成していったことがほぼ確実な状況を示している。